あの世の科学：この世はあの世の反映

A Science of the Other World: The Material World as a Reflection of the Spiritual Worlds

尊田　望　Nozomu Sonda

バハイの教えでは，この世（物質世界）はあの世（精神世界）の反映であると説いている。つまり，あの世の真理をこの世に実現させていくことが，まさにこの世の生活の目的である，と。その意味では，世界文明の展開は，あの世で繰り広げられている文明の反映とも言える。したがって，あの世の仕組みをある程度理解することは，この世の文明を推進することに役立つに違いない。この研究では，物理学，天文学，精神医学，心理学などの分野で進歩している「あの世の科学」を解説し，バハイが築こうとしている世界文明に応用してみる。同時に，バハオラが指摘しておられる，あの世のことを完全に明かすことは，不適切であり，かつ，この世の人間には理解不可能であるという言明の意味合いも探り，あの世の科学への示唆を考察する。

According to the Baha'i teachings、 this world (material world) is a reflection of the other world (spiritual world). That is、 the purpose of living this earthly life is to realize the truth of the heavenly spiritual world. Then、 the world civilization we are trying to build must be a reflection of the divine civilization taking place in the other world. It therefore becomes necessary to understand how the other world works、 to a certain extent. The present study will provide an exposition of the science of the other world taking place in the fields of physics、 astronomy、 psychiatry and psychology、 relating it to the Baha'i concept of a world civilization. At the same、 we will explore the meaning of Baha'u'llah's statement that it is not seemly or possible to disclose the full significance of the spiritual worlds to mortal eyes. Its implications to the spiritual sciences will be discussed as well.

はじめに

「あの世」または「精神世界」が存在することを「示唆」する現象は数えきれない。それゆえ，最近は「あの世は存在するか」という疑問よりも，「あの世はどんなところか」という問いが論点となってきているようにさえ思える。特に 1990 **年代には，天外伺朗氏**(1994, 1997)**による「あの世の科学」，飯田史彦氏**(1996)**による「生まれ変わりの科学」，野村健二氏，恵美初彦氏**（1996）

らによる「霊界の科学」などを代表とする霊界物の書籍が氾濫した。現在もそのブームはある程度続いており，現在最も注目を浴びているのは幸福の科学グループ主催，大川隆法氏による「霊言集」シリーズ(であろう。

また，本収録に収められているガニェ氏の論文にも引用されているように，「あの世を信じている」という人口は，戦後間もない 1958 年と，つい最近である 2008 年では全体的に増える傾向にあり，特に若い世代ではそれが顕著である（統計数理研究所，2008）。また，「臨死体験への関心」は信仰者の間では 70％近く，無信仰者でさえ 60％近くが「ある」と答えている（川又，2007）。2003 年の統計（Market View & Research Co. Ltd.，2003）では，「死後の世界を信じる」という人は社会人の間で 43％に達しており，「祟りがあると思う」人は「たぶん」という程度も含めると 78％（國學院大學 21 世紀 COE プログラム，2004），「神仏霊魂を信じる」人たちは 50-60%（同上）である。一般に日本人は「宗教嫌い」，「無宗教国家」と言われているのに反し，精神世界に関する関心が高いと言える。そして，精神世界に関する関心は「あの世があるか」どうかというよりも「あの世はどんなところか」という方向へ移行しつつあると言っても過言ではないと思われる。

そこで，この論考は，あの世について特に科学的な視点から考察し，バハイの精神世界観と照合することを目的とする。「あの世を科学することなどできるのか」と思われるかもしれないが，実は，精神世界の科学はめざましく発展してきている。特に日本では主流の科学の場で取り上げられないから知られていないだけである。

論考を進める前に，バハイの教えに基づく「結論」を先に述べておく。バハオラは魂の性質と死後の魂の状態についてはすべてを明かすこともできなければ，またそれは不適切でもある（「落穂集」，81 番）と述べている。ただし，これは，あの世のことについて考えたりすることが無意味ということでは決してない。バハイの人材育成コースの最初の本（ルヒブック 1）は「魂の生命」がテーマであり，第 3 章では，「生と死」がトピックになっていることからも，それは明らかである。バハイは，この世の人生が終わってからも，あの世での生活があり，「永遠に」成長を続けると教えられている（バハオラ，「落穂集」，81 番）。したがって当然，あの世での生活の準備をするがために，この世の人生をより良く生きなくてはならない。そのためにあの世について考えることは重要である（アブドル・バハ，*Importance of Deepening*、 p. 19）。バハイでは，この世とあの世の関係については，母体の中にいる胎児の環境と，生まれた後の環境という喩（アブドル・バハ，*The Divine Art of Living*，pp.18-20）でよく説明される。つまり，胎児にとっては子宮こそがすべてであり，子宮以外の世界についてはほとんど知る余地がない。しかし，生まれてきたら，子宮をはるかに超える広大な世界が待っている。同様に，この世にいる人間にとって，「あの世」は理屈で説明されても，実際にはこの世的な想像しかできない。この世を終えてあの世へ行ってから，真の意味で理解できる，あるいは理解し始めるのである。

この論考は以上のような思考的枠組みの中で進めていく。つまり，3次元を超える世界について，3次元的な言語を用いて説明を試みるわけであるから，不完全であることは前提条件である。しかし，この世をより正しく生きていく示唆と洞察を得ることには貢献できるという考えの基に，あの世の科学を検証してみるということである。

あの世の科学の歴史

あの世の科学の歴史は，大きく分けて 3 つの段階がある（野村・恵美，1996，pp.29-68）。第 1 段階は 1880-1930 年代で，この頃，英国心霊研究協会が設立され，精神世界の現象に対する関心が高まった。この協会には，当時の著名な学者や思想家などが名を連ねている。たとえば，シャルル・リシェ（ノーベル賞受賞者），アンリ・ベルグソン（哲学者），ウイリアム・クルックス（元素タリウム発見者），ウイリアム・ジェームス（米国・精神医学・心理学者），テニソン（詩人），グラッドストーン（英国首相），チャールズ・ドジスン（＝ルイス・キャロル，作家），マーク・トウエイン（作家），ジョン・ラスキン（思想家），フレデリック・レイトン（画家） などである。

第 2 期は 1930-60 年代で，超心理学研究が登場する。超心理学とは，心理学を超えた範疇で，テレパシー・透視・念力などの研究を主とする分野である。J．B．ラインがデューク大学に超心理学研究所を設立することにより，大学レベルでも科学的な研究が始まる。交信霊との確認実験などがなされた。

第 3 期は，1960 年代から現在に至る段階で，幽体離脱，臨死体験，脳と心の関係などに関する系統的な研究がなされている。1971-1977 にはカリス・オシスの研究が代表的で，これは医師や看護師の報告を集めたものである。1977-1982 には，データ・理論・学問的知識としての統一化が図られた。ジョン・オデットは臨死研究を体系化し，最初の科学的著書を出した。また，1981 年に国際臨死研究学会を設立している。

この論考では，これらの方法によるデータを詳細に検証するスペースがないので，いくつか主要なものに焦点をあて，考察を進めていきたい。

初期研究を刺激した出来事

精神世界の「現象」の歴史で脚光を浴びた有名な話は，フォックス家のポルターガイスト事件（米国ニューヨーク州，1848）である。姉妹（ケイトとマーガレット）はラップ現象（鼓音現象）により霊と「会話した」。その会話に基づき，殺害されたとする霊の「遺体」が地下室より発見されたが，霊の身分とされる「チャールズ・ロズマ」の身元は確認できなかった。40 年後，マーガレット自身の手記で「いかさま」を告白するが，1 年半後，撤回し，亡くなるまで「真実」を主張し続けた。曰くつきの逸話である。

このように，不可思議な現象が報告されても，あとで「いかさま」だと分かったり，あるいは体験者・証言者が証言を変えていくようであれば，信憑性は大きく揺らぐ。しかし，それにもかかわらず，前述の「事件」は，「いかさま」以上のものを思わせる要素の多い，謎に包まれた事件である。

ダニエル・ホーム（1833-1886）は「大霊能者」と呼ばれ，空中浮遊，身体の拡大，家具の移動，音を鳴らす，霊の物質化，知らない言語の発話，霊との会話など，物理的現象を主に「披露」した。特に一貫した思想を持っていたわけではなく，また，いかさまを指摘されたこともない。1851 年には，ハーバード大学の調査団が現象の信憑性を証言しているほどである。また，心霊現象を見世物にしたり，直接の金儲けもしていない。 信憑性は非常に高い。

現代でも，ユリ・ゲラーを代表に，超能力を有すると称し，それを公で披露している能力者は多い。しかし，ホームのように信憑性の高い霊能力現象もあれば，フォックス姉妹のように「いかさま」を自ら否定したり撤回したりする例もあれば，明らかないかさまを指摘される例もある。いずれにせよ，こういった超能力的現象が事実であったとしても，その多くが，見世物・ビジネスに利用されている。一体何のための超能力かという目的論的課題が残る。

霊界探訪者・霊界との通信者

スエーデンボルグ

スエーデンボルグ（1688-1772)は，18 世紀の欧州最大の科学者で，数学・物理学・天文学・鉱物学・化学・生理学・地質学などの分野に精通した。結晶学の創始者でもあり，史上初の飛行機械の設計図も書いた。このような大科学者が，55 歳の頃から霊的体験を経験し始める。幽体離脱をし，霊界を探訪して得た体験は膨大な『霊界日記』として理性的に綴られている。現代で言えばアインシュタインレベルの学者が幽体離脱をして霊界を探訪したと称しているようなものなので，信憑性は高い。また，詳細で「客観的な」叙述など，科学者らしい体験記を綴っている。

エドガー・ケーシー

エドガー・ケーシー（米 1877-1945）は，「眠れる予言者」という異名を持つ。自身は写真家として生計を立て，宗教的にはたまに日曜学校の教師を務める程度のごく普通の背景の持ち主である。しかし，なかなか治らない喉の病気を治す最後の手段として勧められた催眠治療中に，驚くべき現象が起きた。特に医学的専門知識を持っているわけでもないのに，自らの病の科学的治療法を「語った」のである。もっと驚いたことは，その治療が効き，病気が治ってしまったのである。驚愕したケーシーとその主治医は，催眠治療からしばらく遠ざかっていたが，他の患者を救うために，催眠時の現象がまた起きるかどうか試みた。その結果，同じように，ケーシーは催眠中に治療方法を語り，それが実際にその人の病気を治してしまったのである。

これは後に「フィジカル・リーディング」と呼ばれるようになり，ケーシーは直接会うことなしに，名前と所在地と病状を聞いただけで，催眠中に，その病を実際に直す治療法を語るという「業」を立て続けに行うようになった。ケーシーのフィジカル・リーディングによる医学的治療法は，多くがいわゆる代替医学（alternative medicine）に属する分野のもので，いわゆる西洋医学の主流からは過小評価される傾向になったが，彼の治療法は彼のリーディングを基に活動をしている Edgar Cayce's Association for Research and Enlightenment で科学的な検証が行われ，商品化され，販売されている物も多数ある（http://www.edgarcayce.org，http://www.baar.com/index.shtml）。

ケーシーのリーディングはその後，大きな転換を迎え，次には人の過去を読み取り，それが現在の生活にどう影響を及ぼしているかについて説明する領域に突入していく。いわば，フィジカルリーディングの人生相談版で，「ライフ・リーディング」と呼ばれる。ここまでは，ケーシーは人助けを目的に催眠によるリーディング活動を続けてきたが，周りからの強い勧めにより，今

度は人類の過去の歴史から未来（予言）に至るまでの非常に大きなテーマに関するリーディングの領域に挑戦することになる。あまりの責任の重大さに最初はかなりためらったケーシーであるが，人類のためになる知識であればということで取り組むことになる。ここでは，人類の起源，運命，「失われた謎の文明」であるアトランテイス，そして人類の未来や特定の地域に関する予言などが出てくる。また，キリストの「知られざる」人生についても語っている。

ケーシーの予言は，あたったものもあれば，はずれたものもある。しかし，彼自身は，予言はあくまで「傾向」であり，必ず起きるものではないと述べている。その時の人類や特定の地域の人口の想念から読み取った傾向，流れであるということである。

ケーシーのリーディングに関しては，彼が夢想家であることや「医学的療法」は大部分「代替医学」であり非科学的である，また，予言は的中していないなどの批判も少なくないが，前述のとおり，彼が有していないと思われる知識が披露されたこと，代替医学とは言え実証が進んでいること，予言は絶対的でなく相対的な傾向であることなどを考慮すると，彼の示した現象が妄想に基づくいかさまであると片付けるのは早急であると思われる。

大川隆法

大川隆法氏（1956- ）は，日本が産んだ「大霊能力者」である。氏の主張する内容は，単なる「霊能力者」の域をはるかに超えているが，ここでは，霊的現象に論点をとどめて話を進めるので了解されたい。その霊的能力のひとつとして，氏は古今東西の偉人の霊を招聘し，その言葉を発話したり，自動書記で書きとめたりすることができるというものがある。すでにこのような霊言集は次のような人物の言葉とされ，数百冊発行され，活動は現在も続いている。

> 日蓮，空海，親鸞，天照大神，天御中主神，キリスト，モーセ，ソクラテス，エジソン，カント，リンカーン，ガンジー，坂本竜馬，西郷隆盛，吉田松陰，勝海舟，卑弥呼，福沢諭吉，紫式部，ナイチンゲール，ヘレン・ケラー，孔子，孟子，老子，谷口雅春，内村鑑三，スエーデンボルグ，エドガー・ケーシー，ピカソ，ゴッホ，シェークスピア，ゼウス，ニュートン，天使ミカエル，出口王仁三郎 など

また，最近は，霊言収録の模様をビデオに公開収録をしているため，客観的観察も可能である。ここで非常に興味深いことは，同氏の霊言には，エドガー・ケーシーも出てくることである。そのため，同氏はケーシーに，ケーシーのリーディング現象の背景について問うている。ケーシーは，当時，彼が催眠中に発した言葉は，あの世にいる「高級霊たち」による言葉で，ケーシーの口を借りて発していたと「証言」している（大川，「エドガー・ケーシーの霊示集」）。もちろん，直接証明の余地はないが，つじつまの合う説明である。

また，前述のスエーデンボルグも，大川氏の霊言集にでてくる（「スエーデンボルグ霊示集」）ため，スエーデンボルグの著作と大川氏による前者の霊言とを比較してみることもできる。さらに，大川氏は自身，幽体離脱をして精神界を訪問し，見聞したことを本に書いて出版していると述べている。

このように大川氏の霊言集や霊界見聞録は，ケーシーと同様，いかさまとして簡単に片付けるには，あまりにも規模が大きく，発言内容が濃いため，結論を下す前に，注意深い分析が必

要と思われる。

臨死体験調査

ギャラップ調査

ここまでは，精神界に関する特定の現象や個人による証言だけを取り上げてきた。それは，ある意味では信憑性と客観性に欠けるデータである。これに対し，ジョージ･ギャラップ（1992）は，臨死体験に関して，大規模な社会調査を行いデータをまとめている。その点，客観性が増している。ギャラップは，人間が一時的に死後の世界に入り，戻ってくる現象において通る経路が次の 7 つがあるとしている。

- 事故
- 出産
- 手術後や麻薬の影響
- 急病
- 犯罪の犠牲
- 臨終
- 宗教的幻想･夢･予感

これらの経路を通って体験してきたとされる人々の証言に基づく，あの世の描写をまとめると，次のようになる。

- あの世に行く前に短時間フラッシュバックが起きる
- 別世界の感覚
- 平和で至上の幸福感
- 幽体離脱
- 覚醒状態を視覚的に捉える
- 人間の声を聞いた
- すでに亡くなった人，過去の偉人，預言者などの存在を感じた Felt the presence
- 明るい光
- トンネル
- 未来の予測 ができる。
- 夢のような世界
- 年を取らない
- 体の欠陥がない
- 物質補給の必要なし
- 動植物も存在する
- 霊界の太陽があり，霊的エネルギーの根源となっている

- 霊界は上下左右，時間空間などない。
- 異なる次元に分かれている。
- 幼い魂のための「保育園」がある
- 守護霊の実在
- 肉体生活での生活意識で霊界のレベルが決まる。行動の善悪により霊の善化･悪化がある
- 愛が思考･行動を決定する
- 心の地金がむき出しになる
- 想念の世界：交換･表象化･言葉と文字･実体的創作
- 自分はこう思い込んでいても，それよりレベルの高い魂には別のものが見える。
- 天国と地獄は心の状態
- 他人への奉仕･利他的な相互扶助の世界。現実の世界および霊界の他の人の求めに応じて力を貸す。
- 霊界の階級に応じて課せられた仕事や責務がある。
- 霊体は優れた超能力を持つ，魔法のような力あり，分身も可能（？）。

エバンズの著作

エバンズ（1999）も，霊界に関する見聞録を 1 冊の本にまとめているが，それによると，精神界は次のような特徴を持っている。

- 天界にも「衣服」や「住居」があり，共同社会，奉仕の都があり，愛の療養所がある。
- 霊界にも仕事があり，庭造りから建築活動，保育園，子供の教育などが行われている。
- 馬や犬や小鳥など，ペットも含めて動物がいる。
- 魔法のような力を使うことができる。
- 地上生活のことを記憶している。
- 心の乱れが地獄を作り，それは人によって様相が異なる。つまり，地獄は場所ではなく，心の中に作りあげるものである。
- 天使の救済団がいて，困った人，悩める魂に救いの手を差し伸べている。
- 霊体もエネルギーを消費し，補給しなくてはならない。
- 天界にも結婚生活がある。ただし，それは心と心の結合である。
- 宇宙は 7 つの世界に分かれ，第 1 界の物質界（自然界）以降は全て精神界である。第 2 界は霊界，第 3 は天界，第 4 は超自然界，第 5 が超霊界，第 6 が超天界で，第 7 が愛と英知の根源の世界で，人間的理解を絶する。魂はその成長に応じて低い段階から高い段階へ移っていく。しかし，創造の世界はまだその第一歩を歩み始めたばかりに過ぎず，全体としての進化はまだまだ長い道のりがある。

ギャラップの社会調査も，エバンズの要約も，内容的にかなり一致していると言える。

ここまでの検証で言えることは，あの世が存在するだけでなく，この世からあの世へ移っていった魂たちは人格や記憶を維持すること，（この世の魂とも）何らかの形で意思疎通ができること，魂として成長を続けること，愛・奉仕など何らかの精神的美徳があの世の生活で役立つこと，肉体がなくなった分，思いが強く出てくる世界であること，何らかの仕事や役割を持っていることなどが言えよう。

自然科学的「証明」

精神世界に関する自然科学的な研究は従来，不可能と思われてきた。なぜなら，「目に見える世界」こそが自然科学研究の対象だったからである。しかし，その「目に見える」という定義が，現代科学の進展によって変わってきた。つまり，自然科学が，肉眼では観察できないレベルの世界（超ミクロと超マクロの世界）に突入していったのである。簡単に言えば，電気や電波などは通常，目に見えないけれども存在することは科学者でなくとも受け入れている事実であり，IT 技術はこの領域で機能する。また，ブラックホール，ワームホール，ホワイトホールは実際に肉眼で確認できないが，宇宙の生命や星の誕生・消滅を説明するためには，理論的に必要な概念であり，天文学・天文物理学はこれらの理論で成り立っている。

実は，このミクロとマクロの世界の科学，すなわち量子力学と宇宙物理学を統合させようという理論が存在するのである。これは「大統一理論」と呼ばれており，精神世界の解明のカギを握っていると言われる。そこで，まず簡単に自然科学領域における精神世界の科学の概要を見てみる。

まずはミクロの世界から説明する。ひと昔前まで，原子こそが粒子の最小単位と信じられていた。実際，「アトム」の本来の意味は，この定義に基づく。元素周期表が作られた時に，科学者たちは化学の世界の理解をついに極めたと思っていたが，20 世紀に突入し，原子は原子核と素粒子（電子・陽子・中性子）から成っていることを発見した。中性子論を唱えたのは日本で初のノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹であるが，素粒子の研究は日本ではその後もノーベル賞レベルの研究者を輩出しているくらい高レベルで盛んである。さらに現在では，大きさを持つ点状粒子であるクオークからできているハドロン（陽子，中性子など），大きさのない点状粒子であるレプトン（電子，ミュー粒子など）などクオーク理論に発展している。この分野での進展は，テクノロジーに応用されており，テレビ，パソコン，電子レンジ，携帯電話などの開発に役立っている。しかし，中性子と陽子の間の「強い力」は電磁力と異なり，現時点では説明不可など，まだまだ未解明の謎は残っている。

マクロ世界についてであるが，それは星や銀河の様々な性質や運動，空間と時間などマクロの世界を一貫して説明する重力理論で代表される。星の生命が終わって小さな塊と化し，重力の法則で別の世界へ吸い込まれて行くとするブラックホール理論，ワームホールを通過してホワイトホールから別の宇宙へ新しい星となって生まれていくとするビッグバン説などが最近の代表的な理論である。20 世紀の 2 大宇宙物理学者であるアインシュタインやホーキングは，空間の歪みや時間の歪みの理論を通して宇宙の本質に迫ろうとした。

このように量子力学と相対性理論はこの 100 年で信じられないほど画期的な発展を遂げた

が，この二つの領域を統合させた，自然領域全体を説明できる「美しい」理論，すなわち大統一理論が，科学者たちの追い求める「夢」の理論と見なされている。これは，自然界に働く 4 つの力を統合させて説明できる理論を指す。すなわち，二つの物体間に働く重力（万有引力），磁石，静電気，電波や光の伝播を司り，2種の電子間に働く電磁気力，電子力をまとめる力でミクロの距離でのみ作用し，陽子・中性子間に働く強い核力，放射性原子力の分裂や崩壊を司り，ミクロの距離でのみ作用する弱い核力の 4 つである。大統一理論では，これら 4 つの力を統一する 5 つ目の力を必要とする。

これらを統一する 5 つ目の力が何なのか，まだ解明されていないが，宗教や哲学や思想の世界では「気」，「エーテル」，「プラーナ」，「愛」などという表現で説明しようとしている。

自然科学の世界では，これを「超ひも論」（広瀬，2006；天外，1994；コンノ 1996；京極，2008 参照）で説明しようとする。この理論によると，究極の粒子は「球体」ではなく，直径 10^{-33}cm（＝プランク・スケールという），長さ 10^{28}cm（=宇宙の直径＝150 億光年）の「マカロニ」のようなもの，つまりとてつもなく長い「ひも」であるとする（図 1 参照）。あまりにも直径が小さく，また，ひも自体が毛糸玉のように畳みこまれているため，粒子のように「見える」だけである。超ひも論の方程式を解くと，宇宙は 10 次元または 26 次元になる。2 つの答えが出るのは，ひものタイプによるからで，ひとつは「閉じたひも」で重力に関し，もう一方は「開いたひも」で素粒子に関する。いずれにせよ，時空構造は従来信じられてきた 4 次元ではなく，最低10次元であるとする。4 次元を除いた残りの 6 次元（ないしは 22 次元）は，上述のプランク・スケール領域に畳みこまれているとする。つまり，「あの世」は偏在し，暗在系（精神的世界）はプランクスケール領域に畳みこまれているとされる。

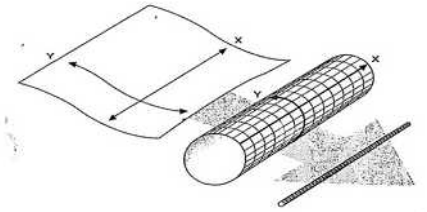

図 1 素粒子は「粒」ではなく細長い「マカロニ」（天下，1994，p.125）

このような考え方は，ボーム（1917-1992）の「宇宙モデル」ですでに語られていた。ボームは米国の物理学者であるが，彼は目に見える宇宙（明在系）の背後には，目に見えない宇宙の秩序（暗在系）があるとし，暗在系には明在系のすべての物質・精神・時間・空間が畳み込まれていると考えた。この「畳み込み」を彼は直交変換または積分変換と呼び，「宇宙モデル」を提唱した。彼は第二次大戦中，原子核分裂の開発にも携わっていたが，後にアインシュタインらと共に核の兵器への利用に対する抗議を米政府に訴えている。そういったレベルの科学者が目に見えない宇宙の存在について科学的に考えていることは注目に値する。

いずれにせよ，超ひも理論は，科学史上最大の「発見」とも言える，とてつもなく深遠な考え方である。なぜならば，これは，いわゆる，「目に見えない世界」あるいは精神世界と呼ばれてきた領域に関する科学であるからである。つまり，テレパシーや透視，未来予知，タイムトラベル

などの現象の説明も，これを通して可能になるかもしれない。まさに，近代科学の終結とあの世の科学の始まりを意味する（天外，1994）（図 2 参照）。

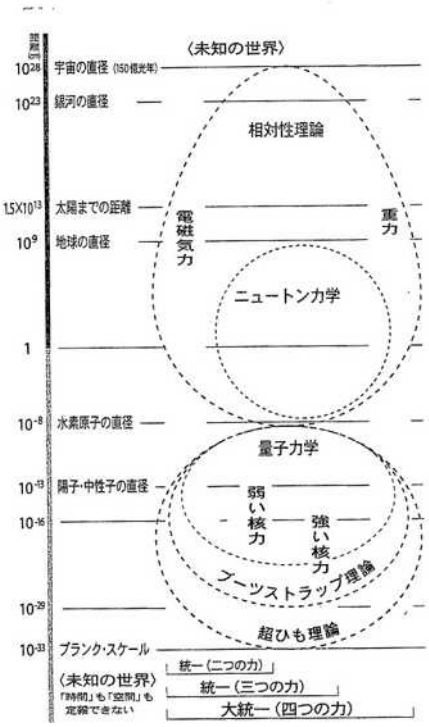

図 2　大統一理論は超ミクロと超マクロの世界の理論を統合する　（天下，1994，p.137）

もし，超能力者がサブ・プランク・スケール領域に畳み込まれた情報を読み取ることができるとするならば，「透視」・「予知」・「テレパシー」などの能力が説明できる。つまり，ケーシーが行ったリーディングも，天界の高級霊と通信したのかもしれないし，無意識のレベルでプランクスケールから直接読み取ったのかもしれないが，何らかの形で，病人の状態を知り，個人の「過去」を読み取り，未来の傾向を知ることができたと説明できるからである。実際，ケーシーは，大川氏の霊言で，個人の「想念帯」と呼ばれる過去の記録からデータを読み取ったと述べている（大川，「エドガー・ケーシー霊示集」，pp.17-21）。

バハイの教えとの比較対照

これまで紹介してきたあの世の科学から示唆される内容は，バハイの教義とどれくらい一致しているであろうか。書面の都合上，全ての点をひとつひとつここで論証することはできないが，概ね，90-95％くらいは一致していると言える。以下に，簡単にまとめてみた。

まず，人は死に際して，この世での自分の行いを反省させられる(バハオラ，「落穂集」81，86，121 番；「隠されたる言葉」，アラビア編，31 番)。あの世は時間と空間から解放されており，

いわば別の宇宙である（アブドル・バハ，The Divine Art of Living、 p. 124）。しかし，あの世とこの世には関係があり，真の意味で切り離されてはいない（アブドル・バハ，Abdu'l-Baha in London、 p. 96）。この世とあの世は，子宮の中の胎児とこの世の関係に喩えられ（バハオラ，「落穂集」81 番；アブドル・バハ The Divine Art of Living、 p. 18-20），その意味では，あの世はこの世を取り囲むような感じであり，この世はあの世を真に理解することはできない。あの世に移った魂は，この世での生活を記憶し（バハオラ、「落穂集」81 番），過去の偉大な預言者や選ばれし者らと会い，（バハオラ「落穂集」81 番），その他，この世でかつて知っていた者ら，友情関係や愛を抱いていた友や家族とも再会できる（アブドル・バハ，The Divine Art of Living、 p. 124）。夢の世界は魂や精神界を暗示する（バハオラ「落穂集」82 番）ように，精神界をある程度垣間見ることのできるヒントを与えてくれる。夢の世界で，われわれは肉体を寝床に置いたまま，移動し，旅し，人と語らう。場合によっては走ったり，何かから逃げたり，崖から落ちたりもする。夢が全て現実ということではないが，精神界の状態をある程度表わしているのかもしれない。精神界は「光の世界」であり，（アブドル・バハ，「生きるということ／死ぬということ），pp.32-33），肉体の衣を捨てた魂は不滅で，それに相応しい姿を装い（バハオラ，「落穂集」81 番），精神界に無数に存在する神の諸々の世界（バハオラ，「落穂集」79 番）を通過しながら，永遠に成長を続ける（バハオラ，「落穂集」81 番）。精神界における魂の糧の源は聖霊つまり神の顕示者であり，この世で祈りを必要とするように，あの世でも魂は祈りを必要とする。魂の成長は，この地上における成長段階にとどまり，この世の生活が影響を及ぼし，その後は神の慈悲の海に投げ込まれる（アブドル・バハ，「パリ講和集」，第 20 章）。天国と地獄は場所というよりも，むしろ，精神的な意味合いで神に近いか遠いかという魂の状態を意味する（バブ，Selections from the Writings of the Bab、 3:8:1、 6:8:4; 3:13:2）。実際，神は不可知であり，決してその本質を理解することができない（バハオラ，「落穂集」19-21 番，76 番）のであるから，「神の面前に達する」，「神に近付く」，「神から遠く離れている」という表現はすべて，象徴的な意味で使われている。人間の本質はその思考にあり（アブドル・バハ，Reality of Man、 p. 9），精神界は想いがもっと強くなる，魂の状態がもっと直接に現れる。したがって，美徳を養っておくことが重要である（バハオラ，「落穂集」122 番；アブドル・バハ，The Divine Art of Living、 pp. 18-20）。幼くして亡くなった子供には，彼らの世話をみるところがある（アブドル・バハ，「質疑応答集」，66 章）。精神界には，この世の人々の援助を担う「天上の群集」と呼ばれる天使の集まりがいる（バハオラ，「落穂集」72，76，121，129 番）。精神界の人々にも仕事があり，それは地上の人々のそれと原則同じである（アブドル・バハ、 Abdu'l-Baha in London、 p. 96）。彼らは独自の領域を持っているが，この世と真に切り離されているわけではない（同上）。あの世の清い魂は，この世の発展の酵母であり（バハオラ，「落穂集」82 番），この世の発明発見，芸術などはあの世の魂らの影響を受けている（バハオラ，「落穂集」82 番）。霊には階級があり，上の階級は下の階級を理解できるが，下の階級は上を理解できない（バハオラ，「落穂集」）。あの世にも建物があり（バハオラ，「落穂集」17，29，42，53，59 番），それは相対的であり，段階に応じて異なる。真の結婚の絆は永久のものである（アブドル・バハ，「バハイ祈りの書」，『結婚の祈り』，p.224）。

いくつかの相違点，または注意点

次に，残りの 5-10％程度の，一致していない点に焦点を当て，あの世に関する理解を深めてみたいと思う。より正確に述べれば，「一致していない」というだけでなく，「焦点のずれがある」という意味合いも込めているので，この二つの点について述べる。

超能力について

最初に挙げるべき点が，実はその相違点ではなく，認識の仕方，焦点の置き方に関するものである。たとえば，バハイでは心霊能力の存在を認めているが，その適切な使い道は，精神界に属するとする（守護者の代理の手紙，Lights of Guidance、 #1735）。逆に，霊能力をこの世で開発したり，使おうとすることは，魂の精神的成長を妨げるとさえしている（守護者の代理の手紙、 Lights of Guidance、 #1737）。これは，霊能力を表に出し，それを用いて活動している団体との大きな相違点である。

ある意味でこれは「ハリーポッター」の世界に通ずるものがある。つまり，ハリーとその仲間たちは「学校」で，魔法の力を適切に用いる修行をしているのであるが，それは彼らの内面的な成長と強く関連している。霊能力に関するバハイの教義も，それに似ており，基本的に，この世ではいたずらに開発すべきものではなく，あの世に進んでから正しい使い道を学ぶべき領域のようである。

また，霊能力に関しては，個人が受けるインスピレーションは，その個人の想像によるものと真理との区別がしばしば難しいので，注意が必要である（守護者の代理の手紙，Lights of Guidance、 #1740)。つまり，本人は霊界からインスピレーションを受けていても，それは他の魂からのメッセージかもしれないし，それが正しいものとは限らないのである。このように，個人的な経験と聖なる啓示とには違いがあり（守護者の代理の手紙，Lights of Guidance、#1741)，現在，新興宗教が日本に溢れているのは，これと関連していると思われる。つまり，バハイではおよそ 1000 年に 1 度くらいの周期で神の顕示者が遣わされ，独立した神の宗教を説く（バハオラ，「落穂集」，125 番）と説かれているので，これに基づく限り，現在日本だけでも 4 万近くの新興宗教団体が存在する（文化庁，2006）ということは，神の宗教を人々が分裂させて分派が生じたこと，あるいはそれ以上に個人の考えによって創り上げられた宗教団体も多いと考えられる。その背景には，霊界からのメッセージや影響というものも大いに考えられるのである。

霊能力に関してもう一つ述べるべきは，「奇跡」についてである。バハイではいわゆる「奇跡」と呼ばれる業は，歴史的に存在するが，相対的にはあまり強調されていない（アブドル・バハ，「質疑応答集」，16-23 章）。つまり，物理的な奇跡は，そこに居合わせて目撃した人のみが証言できるし，また，仮に「目撃」しても，何かのいかさまであろうと疑うことも多い。このように，奇跡の物理的な局面は非常に限られており，意味合いが合わない。むしろ，バハイでは，奇跡は，精神的に準備され，その意味がわかる者にとって深い意味合いがあり，価値があるとされる（同上）。

あの世からの離脱

さらに，この世に魅力や素晴らしい点があるように，あの世にも魅力や素晴らしい点があり（あの世はこの世より，もっと素晴らしい），表面的な意味であの世に愛着を持つことは危険である。

霊能力を商売道具にすることは，ある意味では，あの世の利点を利用しているわけである。しかし，バハオラの教えはさらに先を行っており，この世の益に愛着を持たず，離脱するように，あの世の益からも離脱しなくてはならないと勧告しておられる。（バハオラ，アディブ・タヘルザデ，1977，pp.35-44 に引用）。真の意味での精神的成長は，ただこの世を捨て，あの世のことだけに固執することではない。つまり，世捨て人になり，この世のことを省みないことが，「精神的に優れた人」の意味ではないのである。バハオラの教える真の意味での精神的成長の意味は，むしろ，この世からもあの世からも超脱し，神の意志に従って生きる，すなわち，この世にいる間はこの世をより良い世界にできるように人類世界に奉仕すること，したがって，常にこの世の問題や課題の解決のために協議し，忙しく従事することである（バハオラ，「落穂集」，106番）。しかし同時に，この世に愛着を持ちすぎず，精神界へ進むべき時が来たら輝かしい精神で次の段階へと進まなくてはならない。

つまり，精神界や魂の存在を否定し，この世の利益のみにあくせくする物質主義的態度に問題があるだけでなく，この世の人生を生きようとせず，世を捨て，人を捨てて苦行する隔離生活も欠陥があるのである。さらに自殺行為を犯す人は多くの場合，精神界の存在を知らず，自分の魂についても考えていないため，あの世に行ってから，必ずしも幸せにはなれないのである。

さらには，精神界を知っており，魂を意識し，精神的な旅路をしっかりと歩んでいる人にも，「名前の王国」という大きな落とし穴がある。それは，精神的な特質を養って成長したと思っていても，「あなたは精神的に優れた人物」であるという賞賛の言葉に溺れてしまう危険性である。人は常に，そういったことから心を清めておかなくてはならない。バハオラはこれを「名前の王国」からの離脱と呼んでおられる（アディブ・タヘルザデ，1977，pp.35-44 に引用）。この世からもあの世からも離脱していても，精神的旅路を歩む者は常に謙虚でなくてはならない。ちょうど，「七つの谷」（バハオラ）の最後の谷「真の貧困と全くの無の谷」にあるように，人は自我から超越し，神のご意思の海に浸ることが悟りの境地なのである。

したがって，あの世や魂は存在し，超能力・霊能力も存在し，すでに多くの人々が精神界との通信や交流をする能力を持っていると見受けられるが，バハイの教えからすると，それは当然のことで，もっと高いレベルでこの世とあの世の仕組みを理解しなくてはならない。神の創造の目的がどこにあり，どうやったらそれを達成できるか，精神的成長の意味とは何なのか，この世の発展，あの世の文明はどうやって展開していくのか，こういった事柄を良く理解していなければ，この世で霊能力を使えても，あるいはあの世に進んでいっても，真の意味での幸福，成長と発展はなさそうである。そのためには，バハイはその時代の神の顕示者の教えに向かうことが最も適切で効果的な方法（＝「まっすぐの道」）であると理解する（バハオラ，「落穂集」，18番，153番）。

輪廻転生論について

もうひとつ，決定的な「違い」として挙げられるのが，輪廻転生の理論である。あの世の検証に関しては，古今東西を通して類似点が多いのに，輪廻転生に関しては唯一と言っていいほど，大きく異なる。この論考で取り上げる範囲では，大川隆法氏，エドガー・ケーシーは輪廻を語っているが，スエーデンボルグの見聞録にはその話が出て来ない。一般的に，霊界見聞録の場

合は，東洋系と西洋系で違いがあると言われ，東洋系の方に輪廻転生の言及が多いとされるが，上記のエドガー・ケーシーは例外である。

ユダヤ教，キリスト教，イスラム教では輪廻転生を語っていないが，初期キリスト教では輪廻を語っていたが後の神学者会議でその部分が省かれたとする説もある。またヒンズー教や仏教は生まれ変わりを説いていると一般的に考えられるが，これは，ある精神的真理を説明するための比喩にすぎないという考え方もある。

バハイでは，輪廻転生を説いていない（アブドル・バハ，「質疑応答集」，81 章）が，何故，この点に関してこのように食い違いが生じるのかを検証することは，あの世を理解するために役立つと思われる。

まず，輪廻転生論にはいくつかの種類がある。ひとつは，「死んですぐに他の肉体で生まれ変わる 」とする説で，もうひとつは，「死んでしばらくはあの世で生活し，再び生まれ変わる」とする説，さらに「人間と他の生物（動植物など）の間で生まれ変わる」とする説や「解脱するまで，修行のために，一部の魂のみ生まれ変わる」とするものもある。

こういった思想の背景には，過去の償いをする，よい行いは報いを受けるという「業（カルマ）」の概念がある。それは，この世的な視点から見れば，論理的で正義の原理も成り立つので，わかりやすい。

もうひとつの関連概念は，時代は変わり，文明も推進されるので，「古代」にこの世に生まれた魂が，再び「現代」のこの世に生まれ変わるのは，新しい環境で人生を生きることで，新たな魂の学びになる，というものである。これも，ある意味では納得の行く，合理的な考えである。

では次に，輪廻転生の「証拠」として考えられるものをいくつかあげてみる。ひとつは，退行催眠・トランス状態において「過去生を語る」というものである（飯田，1996）。これは，精神医学の分野でデータがかなり蓄積されているので，その「過去生」の内容そのものが真正のものかどうかは別として，現象としては妥当とされる。その語られた過去生の内容を検証して，信憑性を検証するのであるが，一部は，ある小説に出てきた登場人物や内容と酷似しているなど，信憑性がかなり疑われるものから，幼い子供など，どう考えても自分で調べて知ったとは考えられない，外国でしかも 100 年以上前に実在した（無名・ごく普通の）人物やその人生を自分の過去生として語った例など，信憑性が至極高いと思われるものまである。

しかし，後者の場合でも，必ずしもそれが本当にその人の過去生だったかどうかという絶対的証拠にはならない。なぜならば，前述のサブプランクスケール領域の概念を活用すれば，その魂がサブプランクスケール領域から読み取り，それを伝えた，あるいはあの世の魂が，その魂にその情報を伝えたということは大いに可能だからである。

実際，エドガー・ケーシーの場合は，他者の過去生をリーディングしているわけで，自身が催眠状態でそれを行っているから，サブプランクスケール領域から読み取った，あるいはあの世の魂から通信を受けて「知った」とする説の方が可能性は高い。実際，彼は，大川氏の「霊言」では，自分が催眠中に精神界の高級霊からメッセージを受けてリーディングを行ったと「述べている」（「エドガー・ケーシー霊示集」）。

ならば，催眠・トランス状態中に自身あるいは他人に関するデータを知るということは可能ではあるが，それが本当にその人の過去生であるかどうかという直接証拠にはならない。

さて，これとは別に，本当は輪廻転生ではないが，あたかも輪廻転生のように捉えられてい

る現象もありうる。たとえば，幸福の科学では「魂の兄弟」（本体 1 人に分身が 5 人）が交代にこの世へ降りて来ると述べている（大川，（「太陽の法」，p.63）が，魂の兄弟の経験はあたかも自分の経験のように捉えられるので，それを厳密な意味での輪廻転生と呼ぶことはできない。あくまで経験の共有にすぎない。

これに関しているのは，ユングの「集合意識」理論である。集合意識とは，精神界における複数の人々（家族・部族・国・人類など）による意識の共有である。つまり，魂は無意識レベルで他の魂と何かを共有しているのであるが，この世における経験を共有した場合，それがあたかも自分の魂の輪廻転生のように捉えられることもあり得る。つまり，多くの魂がひとつの個体の魂をサポートしているのかもしれない。

もうひとつ，輪廻転生論で説明を要する難点は，生まれ変わる時点で「記憶がリセットされてしまう」ことである。過去の罪を償う，あるいは過去の過ちから学んで新しい生でやり直すのは良いが，過去の記憶がなければどうやってそれができるのであろう？また，人生を終えてあの世に戻ったら，過去の記憶はどうなるのであろう？過去のさらに過去の記憶はどうなるのであろう？学びのプロセスという意味では理解しがたい理論である。

もちろん，この世でも，過去生リーディングや退行催眠などをすれば，過去の記憶が蘇ると言われるが，それが本当に自分の過去生かどうかを確認する術がない。

いずれにせよ，輪廻転生論とバハイ理論の究極的な思考の違いは，前者はこの世に戻ってきてカルマを摘むこと，あるいは時代を経てからこの世で新しい経験をすることで魂が成長すると考えるのに対し，バハイでは，進歩は，後退することではなく，常に前進することに基づいているということである（アブドル・バハ，「質疑応答集」，81 章）。つまり，何度も輪廻転生をするということは，ある意味では，大人が何度も小学生に戻るようなものである。もちろん，現在の小学校教育は IT 教育など，昔はなかった要素も多いので，大人でも学ぶことは多いであろうが，すでに数十年もの人生を経験した大人が，小学生に戻ることで，スムーズな人生体験ができるであろうか。その数十年間にわたる経験を活かすとするならば，やはり大人の世界でさらに進んだ段階で修業を積むべきではなかろうか。アブドル・バハの論点は，成長は，何度も同じ段階，つまり小学生（この世）に戻るのではなく，さらに高等な教育段階（あの世）へ次々と進んでいくところにある，ということである。

これを，前述の「子宮の中の胎児」の例えに戻って考えてみよう。子宮で正常な発達をできなかった場合でも，子供は生まれ，障害を背負いながらもこの世の生活をする。障害を背負う生活は，時に想像を絶する耐え難さがある。しかし，逆境をバネに偉大な業績を達成することもある。では，障害がない人生を送れるようにと，もう一度子宮に戻るであろうか。この世の人生を知った後で，また子宮に戻れるであろうか？ひょっとして，母親の生活の不摂生で，また障害を背負って生まれたらどうするのであろうか。

同様に，あの世へ進んだ魂は，この世とは非常に異なる環境に入る。より高次元の世界である。ならば，わざわざ低次元の世界に戻って生活をするだろうか？

輪廻転生論は，この世を中心とした見方で，それはあかたも，子宮を中心として，子宮とこの世の人生を語るのと同じことである。非常に制限の多い理論である。むしろ，バハイの死生観は，この世の人生は，無数にある神の世界を通した永遠の成長過程の始まりにすぎないとする。短いようで長いこの世の人生であるが，永遠に続く精神界での成長過程と，この相対的に短い地

上での生活がどう関係しているのかについて，また，輪廻転生がないとするならば，ただ 1 回きりの地上の人生は，あの世での生活とどう関係しているのか，まだまだ解明の余地が残っているし，筆者は，それについて理解しているとはまったく言えない。

究極的に，バハオラは「生と死の神秘は隠されたまま」である（「落穂集」）と断言しており，また，あの世の性質については完全に明かすこともできなければそれは適切でもないとも述べておられる（「落穂集」）。また，死ぬ際にこの世の虚ろな想像から解放されていること，一方(この世)を人間の目に明かし，他方(あの世)を隠しているのは，心の清い者のみが理解しうる真理である，と述べておられるように，我々は，心を清めて，離脱した精神で瞑想することにより，精神的世界のことを理解できるのである。

この世の文明の推進への示唆

以上が，あの世の科学に関する検証とバハイの教えとの比較対照であるが，この論考で学んだことは，この世の文明の推進にどう適用できるであろうか。広範囲にわたる考察はできないが，本質的な部分について考えてみたい。

まず，アブドル･バハは，精神界の人々にも仕事があり，それは地上の人々のそれと原則同じである（Abdu'l-Baha in London、 p. 96）と述べており，また，バハオラは，あの世の清い魂は，この世の発展の酵母であり（「落穂集」82 番）），この世の発明発見，芸術などはあの世の魂らの影響を受けている（「落穂集」82 番）と述べている。すると，ひとつ考えられることは，この世の科学や芸術などの活動は，あの世の活動にもつながっているのだから，いわゆる学校での勉強はおろそかにできないということにもなる。つまり，勉強や科学技術的な事柄が精神的な成長と無関係という見方はできなくなってくるのである。特に学校で勉強をする児童･生徒･学生にとっては重要なポイントであり，勉学を奨励する側にある保護者･親･教師としても，どのような意味で奨励すべきかについて大いなる示唆を与える。

そして，日々，天上界からのガイダンスにより導かれる必要がある。その意味では，祈りというものをもっとよく理解する必要がある。実際，バハイ世界共同体は，祈りの会を核となる活動のひとつとして単独で掲げている。それは，祈りというものが生活に密着し，この世の発展に関わっているからである。祈りはしばしば，無意味で単なるおまじないと捉えられがちであるが，祈りに心がこもらず，集中に欠ける場合は，正にその通りかもしれない。しかし，この論考で述べてきたとおり，この世とあの世は通じており，あの世からのインスピレーションや援助があるならば，祈りはそれを可能にする手段である。つまり，真の祈りを捧げる時，われわれは，神とあるいは神の顕示者と，あるいはあの世に住む聖者や天使や清い魂たちと，あるいは自分の先祖，家族，親戚，友人らと，あるいは自分の魂と会話をするのである。条件がそろえば，彼らの発しているインスピレーションを受け取り，それをこの世において具現化していくことが可能になる。また，われわれの願いが彼らに聞き入れられ，我々の生活や活動を援助してくれる。むろん，彼らには彼らのルールがあり，原則は「天は自らを助くる者を助く」という昔からの諺通り，我々が行動を起こすことにより，彼らも援助を施せるようになっているようである。

このようなプロセスが働いているとするならば，当然，祈りにはもっと力を注ぎ，ある程度の

時間を割き，集中して行うことが必要になってくる。したがって，「祈りの会」が核となる活動として単独に設けられていることは当然のことだということが理解できる。

実際，バハイの教えには，礼拝堂を中心とする「マシュレゴウル・アズカー」という概念があり，これは日々の祈り，社会福祉的，教育的，科学的活動と密接に関係している。守護者は，こう述べている。

> ．．．この崇高なる礼拝堂の中心の建物で見られるように，バハイの礼拝の概念がいかに感動的なものであれ，バハオラがお定めになったように，マシュレゴゥル・アズカーがバハイ共同体の有機的生活において果たすように定められた唯一の要因として，いや，本質的な要因として見なすことはできません。マシュレ ゴゥル・アズカーの附属機関を中心としてなされる社会的，博愛的，教育的，そして科学的活動から切り離されたら，バハイの礼拝は，その概念においていかに 崇高であれ，また，その熱心さにおいていかに情熱的であれ，苦行者の瞑想や消極的な崇拝者の祈りが生じる乏しく，はかない成果を超えることもできないので す。それは，マシュレゴゥル・アズカーの附属機関が最高の特権として促進し助長する。人類の事業への精力的かつ非利己的な奉仕活動へと移されない限り，崇 拝者自身にも，ましてや人類全体にも，永続する満足と利益を与えることはできないのです。また，マシュレコゥル・アズカーの周辺で，将来のバハイ共同体の 業務運営に従事する人々の努力は，いかに非利己的かつ精力的であっても，マシュレゴゥル・アズカーの中央の礼拝堂に集中し，またそこから広がる精神的な機 関との密接な日々の交わりがない限り，実を結び，成功することはないでしょう。マシュレコゥル・アズカーの中心に位置する礼拝堂から発される精神的な力 と，人類への奉仕の業務を司る人々が意識的に示す活力との直接で常時の相互作用の力以外いかなるものも，人類を非常に長い間，激しく苦しめてきた病を取り 除くのに必要な力を与えることは到底できないのです。というのは，苦悩する世界の救いは，確かに究極的には，バハオラの啓示の効力を意識することに依存す るからです。そしてその意識は，バハオラの精神との交わりによって，また，バハオラが啓示された原則や法律を理知的に応用し，忠実に遂行することによって 強化されるのです。そして，バハオラの聖なる御名に関する全ての機関の内で確かに，マシュレゴゥル・アズカーの機構ほど人類の新生のために非常に重要なバ ハイの礼拝と奉仕に不可欠なものを十分に与えることのできるものはないのです。そこに，バハオラがもたらされた顕著な機構のひとつとしてのマシュレゴゥ ル・アズカーの思慮深さと力と独特な地位の秘密があるのです。（ショーギ・エフェンディ，*Bahá'í Administration*，pp.185-186）

アブドル・バハも，マシュレゴウル・アズカーを通して科学と宗教が調和すると述べている。

> これらの施設や大学や病院，不治の病に苦しむ人々のための建物や高等な科学を教え，大学院の課程を提供する学校，そしてその他の博愛的事業を行う建物が建 てられた時，その門戸は，あらゆる国や宗教に開放されるであろう。そこには，いかなる境界線も引かれることはないであろう。その慈善事業は，皮膚の色や人 種にかかわりなくな

されるであろう。何人にも偏見を示すことなく，全ての人に愛をふりまき，その門戸は全人類に広く開け放たれるであろう。中央の建物は， 祈りと礼拝のために用いられるであろう。こうして．．．宗教は科学と調和し，科学は宗教の侍女となり，両方とも，その物質的，精神的贈り物を全人類に豊富 に与えるであろう。（アブドル・バハ，エッセルモント，1978，pp.215-216 に引用）

現在，マシュレゴウル・アズカーのある地域は世界でも数か所に限定されており，日本にはまだその用地があるのみであるが，根本的に言えば，われわれが日々，家庭で行っているお祈り自体が，マシュレゴウル・アズカー（＝「神のことを述べる夜明けの地」）の機能を基本的に果たしているのであり，共同体で行う「祈りの会」はその基盤をなすものと言えよう。したがって，祈りの会は，社会福祉・教育・博愛事業とも関連し，文明を推進していく原動力を潜在的に有しているとも言えよう。それほど重要な活動なのである。

結論

冒頭で，バハオラが，あの世の真相についての完全な理解は不可能であると述べていることを強調した。したがって，この論考はあくまで，この世を生きるにあたって役に立つ程度のレベルの理解の小さな試みにすぎないことを断わっておきたい。しかし，あの世に関する研究は，かなり進んでいるという事実は新しい発見であった。まさに，あの世は存在するかというレベルではなく，あの世はどんなところか，ということを真剣に追求した研究がかなり行われているのである。

また，霊能力を有する（と称する）人物も多く，それはある時は商売道具に用いられ，ある時は人を助けるため，あるいは人類の知識と理解を深めるために用いられたりしている。しかし，バハイの視点から見ると，これらの能力は，この世であまり干渉すべきでなく，あの世の生活の中で適切に使うことを学ぶのが賢明である。

超ひも論に見られる精神界の自然科学的な検証は画期的で，人類の世界観・宇宙観を全く変えてしまった。神の世界は無数で，その範囲も人知を超えるというバハオラの言葉からすると，この理論がすべてを説明しているとは考えられないが，それでも，これまでの考えを完全に覆すような理論である。精神界の存在を示唆するという意味では，大変な功績である。

輪廻転生論には，論理的に課題点がたくさん残り，特に魂の進歩をこの世を中心とした見方に偏って説明しているよう見受けられる。しかし，美徳を養う，魂を磨く，より良い社会を築く，文明を推進するという意味では，どの宗教や思想でも共通である。したがって，輪廻転生に固執するよりも，そこに焦点を置いて生活をする方がより建設的だと思われる。

残念ながら，宗教とはしばしば，単なるおまじない，心理的に虚弱な人たちの想像物，非科学的で非合理的と思われている。今回の論文が，宗教的世界・精神的世界をもっと科学的に捉え，宗教は，この世の生活をより豊かにし，発展を促すものであることを理解することにつながることを祈っている。

引用文献

アブドル・バハ (Abdu'l-Baha)(2005/1959).「パリのアブドル・バハ講和集」. 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修, 東京, バハイ出版局.

――. (1990).「質疑応答集」. 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修, 東京, バハイ出版局.

――. (1982). Abdu'l-Baha in London. London: Baha' i Publishing Trust.

Bab, The (1982). *Selections from the Writings of the Bab.* Department of the Universal House of Justice and trans. by Habib Taherzadeh with the assistance of a Committee at the Baha'i World Centre. Haifa: Baha'i World Centre.

「バハイの祈りの書」(2003). 東京:バハイ出版局.

バハオラ (2005).「隠されたる言葉」. 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修. 東京, バハイ出版局.

――.「落穂集」(2011). 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修. 東京, バハイ出版局.

――.「七つの谷」. 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修, <http://www.bahaijpn.com/library/baha/seven_j.htm>

文化庁統計 (2006). <http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index39.htm>

The Divine Art of Living (1944/1979). Comp. by M. H. Paine. Wilmette、 IL: Baha'i Publishing Trust.

エバンス, M.H. (1999).「これが死後の世界だ」, 近藤訳。東京:潮文社。

Edgar Cacey's Association for Research and Enlightenment. <http://www.edgarcayce.org/ and <http://www.baar.com/index.shtml>

エッセルモント・ジョン (1978).「バハオラと新時代」, 日本バハイ全国精神行政会翻訳監修, 東京:バハイ出版局。

ガニェ, アイザック (2011).「世界文明の時代における日本の精神性」, 第 18 回日本バハイ研究会大会収録

ギャラップ・ジョージ (1992). 死後の世界, 丹波哲郎訳, 三笠書房。

広瀬立成 (2006) .「超ひも理論」, 東京:ナツメ社。

「生きるということ・死ぬということ」(1996). ワイコフ訳・編纂, 久留米:ローズ出版。

國學院大學 21 世紀 COE プログラム(2007). <http://21coe.kokugakuin.ac.jp/modules/wfsection/article.php?articleid

=96>

The Importance of Deepening Our Knowledge and Understanding of the Faith (1984). Wilmette、 IL: Baha'i Publishing Trust.

飯田史彦(1997).**「生きがいの創造」. 東京,** PHP **研究所.**

京極一樹(2008).**「こんなにわかってきた素粒子の世界」, 東京:技術評論社。**

コンノケンイチ(1996).**「死後の世界を突きとめた量子力学」. 東京, 徳間書店.**

川又俊則 (2007) .**「現代学生の宗教意識」**http://toshi-k.net/list/308.htm

Lights of Guidance (1989). The. Comp. Helen Hornby. Revised and enlarged edn. New Delhi: Baha'i Publishing Trust.

Market View & Research Co. Ltd.(2003).「Generation 2001／**次世代を担う若者の意識調査**」<http://www.mv-r.co.jp/gen_2001/g001.htm>

野村健二, 恵美初彦 (1996) .**「霊界を科学する:科学と体験からみた霊界の法則」. 東京, 光言社.**

大川隆法(1990a).**「太陽の法」. 東京, 角川書店,** 1990.

——(1988).**「エドガー・ケーシー霊示集」**1988**, 東京:土屋書店。**

——(1989).**「スエーデンボルグ霊示集」**1989**, 東京:土屋書店。**

——(1990).**「永遠の法」**1990**, 東京:角川書店。**

The Reality of Man (1931/1971). New Delhi: Baha'i Publishing Trust.

Shoghi Effendi (1974). *Baha'i Administration: Selected Messages: 1922-1932*.Wilmette: Baha'i Publishing Trust.

Taherzadeh、 Adib (1977). *The Revelation of Baha'u'llah: Vol. 2*、 *1863-1868*. Oxford: George Ronald.

天下伺朗(1994).**「ここまで来たあの世の科学」, 東京:祥伝社.**

——(1997).**「宇宙の根っこにつながる生き方」. 東京, サンマーク出版.**

統計数理研究所(2011).
<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_all_g.htm>